Osaka University Knowledge Archive

Title	癌で近親者を失った遺族の精神健康と二次的ストレッサー
Author(s)	柏木, 哲夫
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43122
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【44】

氏　　名	柏木哲夫（かしわぎ てつお）
博士の専攻分野の名称	博　士（医　学）
学位記番号	第　16468　号
学位授与年月日	平成13年7月4日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**癌で近親者を失った遺族の精神健康と二次的ストレッサー**
論文審査委員	（主査） 教　授　武田　雅俊 （副査） 教　授　多田羅浩三　　教　授　森本　兼曇

論文内容の要旨

【目的】

本研究の目的は、癌で近親者を失った遺族の精神健康の実態と、その関連要因としての二次的ストレッサーについて明らかにすることである。わが国における遺族への援助は始まったばかりの発展途上段階である。今後、精神科医やカウンセラーなどが中心となり、遺族支援のシステムが確立されていくことが望まれる。一方で、そのための基盤を提供する基礎的データの蓄積が必要である。本研究がその基礎的データを提供するというのも、本研究の実際的な目的である。

【方法ならびに成績】

1．対象と方法

淀川キリスト教病院ホスピスにて、1996年4月から1998年12月の間に、癌のために近親者を失った503家族を対象とし、郵送法による無記名方式での質問紙調査を施行した。調査は2度に分けて行われ、第1回調査（190家族）は1997年3月から10月にかけて、第2回調査（313家族）は1999年10月から11月にかけて実施された。調査の結果、337家族544名から有効回答が得られた（回収率67.0%）。回答者の性別は男性199名（36.6%）、女性345名（63.4%）であり、年齢は8歳から90歳で平均47.2歳（SD＝16.3）であった。故人との続柄別では、配偶者が204名（37.5%）、子が257名（47.2%）、親が16名（2.9%）、同胞が26名（4.8%）、その他が41名（7.5%）であった。その他には、孫、嫁、婿、義父母などが含まれる。死別後経過期間は、6カ月から30カ月で平均14.9カ月（SD＝6.8）であった。

2．成績

1．精神健康関連症状

近親者を癌で失った遺族は「不安と不眠」に含まれる症状の訴えが平均で52.6%と最も多かった。そして、「身体的症状」が平均44.7%でこれに続く。また、「社会的活動障害」や「うつ傾向」の症状の訴えも少なくはなかった。つまり、今回対象となった遺族は、不安感や睡眠障害、疲労感といった症状を中心に、幅広く精神健康関連症状を呈していたといえる。

2．神経症傾向者のスクリーニング

回答者544名におけるGHQ-28の得点範囲は0～28点で、平均得点は9.0（SD＝6.8）であった。カットオフポイント6/7点によるスクリーニングの結果、307名（56.6%）が「神経症傾向群」、235名（43.4%）が「正常域群」に分

類された。

3．神経症傾向群と正常域群の回答者属性

回答者属性を2群間で比較したところ、性別に関して1％水準で有意差が認められ、女性の方が神経症傾向群の占める割合が大きいことが示された。

4．精神科受診希望

回答者全体の回答結果と、神経症傾向群と正常域群別での回答結果をみると、回答者全体では、「受診したいと思ったことはあった」との回答が41名（14.3%）、「受診した」との回答が4名（1.4%）であった。群別では、両群で回答割合に有意な違いがあり（$\chi 2=25.3$, $p<.001$）、正常域群の方が「受診したいと思わなかった」との回答割合が大きかった。

5．二次的ストレッサーの経験率

第2回調査で設定した二次的ストレッサーに関する設問に対し、283名から有効回答が得られた。最も経験率の高かった二次的ストレッサーは「死別後の行事や手続き」で283名中152名（53.7%）であった。「親戚とのトラブル」（31.8%）、「一人暮らしになった」（29.0%）がこれに続く。

6．二次的ストレッサーと精神健康との関連

神経症傾向群と正常域群を比較すると、神経症傾向群の方が、設定した全ての二次的ストレッサーについて、経験率が高かった。特に、「死別後の行事や手続き」「思いやりのない言葉」「経済的問題」「親戚とのトラブル」「家族コミュニケーションの悪化」に関しては、$\chi 2$検定の結果として有意差が認められた。この結果は、二次的ストレッサー経験と遺族の精神健康との関連を示すものであるといえる。

【総括】

本研究では、癌で近親者を失った遺族を対象とし、死別後の精神健康と二次的ストレッサーに関する調査を施行した。その結果、精神健康関連症状として、不安感や睡眠障害、疲労感をはじめとするさまざまな症状の発現が認められた。GHQ-28によるスクリーニングの結果、回答者の56.6%が神経症傾向と判定された。また、14.3%が精神科受診を一度は希望し、実際に受診した者も存在した。これらの結果から、癌で近親者を失った遺族における遺族ケアのニーズが示唆された。二次的ストレッサーに関しては、遺族による多様な二次的ストレッサーの経験が確認されたと共に、遺族の精神健康との関連が明らかにされた。この結果に基づき、遺族に対する問題解決型援助の必要性が示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、癌で近親者を失った遺族を対象とし、死別後の精神健康と二次的ストレッサーに関する調査を施行したものである。その結果、精神健康関連症状として、不安感や睡眠障害、疲労感をはじめとするさまざまな症状の発現が認められた。GHQ-28によるスクリーニングの結果、回答者の56.6%が神経症傾向と判定された。また、14.3%が精神科受診を一度は希望し、実際に受診した者も存在した。これらの結果から、ガンで近親者を失った遺族における遺族ケアのニーズが示唆された。二次的ストレッサーに関しては、遺族による多様な二次的ストレッサーの経験が確認されたと共に、遺族の精神健康との関連が明らかにされた。この結果に基づき、遺族に対する問題解決型援助の必要性が示唆された。

本研究は死別後の二次的ストレッサーに焦点をあて、遺族に対する問題解決型援助の必要性を提言したという点で、独創的であるということができる。研究方法や考察の進め方もすぐれており、論文審査の結果として、本論文は博士（医学）の学位を授与する価値があると認定した。